

随 想

## 大学のごみ問題

佐々木 教祐

大学では色々な問題に対して委員会が作られ、学部などの組織から委員がでて対処の方法を話し合っている。私も昨年4月から廃棄物等処理専門委員をやらされている。何について話し合うかと言えば、「実験すると出てくる薬品の廃液、薬品の空ビン、排水をどう処理して捨てるか?」、「使わなくなった古い薬品をどう処理して捨てるか?」、「写真の現像処理などで出る廃液はどうするか?」、「実験動物などの後始末をどうするか?」、「最近有名になったアジ化ナトリウムのような毒物、劇物の管理をどのようにしていくのか?」、「学生や職員達の出すペットボトル、ビン、カン、ゴミなどの問題」、「昔使っていた PCB の入っているトランスなどの処理はどうするのか?」など不要物すべての処理及びそれについての教育研究が対象になる。

大学のある名古屋市では、当初予定していた藤前干潟がごみ処分場として使えなくなったためゴミの減量化が大きな問題になってきている。市のごみは平成9年度には103万7千トンに達し、ごみ処分場も余裕がないことから市も重い腰をあげて「ごみ減量先進都市」を目指して種々の施策を打ち出し始めた。すなわち、ごみの発生を押さえるため、過剰包装、レジ袋などを「イイデス!」と断るイイデス運動、集団資源回収実施団体登録制度、リサイクル指導事業(アルミ缶)、粗大ごみ収集の有料化などである。さらに、ごみの分別収集により空きびん、空き缶、ペットボトル、紙パックをリサイクルする事により平成11年度には12%ごみの減量化ができたとしている。しかし、私の授業を受けている学生に言わせると、自分の住んでいる町はそんなことはずっと前からやっており、今ではもっと徹底した分別回収をやっている。名古屋市は遅れているとのことである。

さて、大学内でのごみ減量化の取り組みは、名古屋大学生協や学部などがバラバラに行っていたが、今年の4月から全学的に統一してごみ減量化・リサイクル推進の実施に向けて、学内に食堂、売店などを持つ生協も含めて「ごみ処理対策プロジェクトチーム」を作り、ごみの回収・処理のためのガイドライン作りが始まっている。案によると、回収資源ごみとして、かん類、びん類、ペ

ットボトル、牛乳パック、食器トレイ、新聞・雑誌・コピー用紙などの古紙、ダンボールなどはすべて回収することになっている。また、蛍光灯、電池なども産業廃棄物として回収することになる。また、名古屋市より一步進んでいるのは、排出者責任を明確にするため、可燃ごみ、不燃ごみも含めて、回収袋にはごみを出した研究室など各組織の名前を書くことが求められていることである。最近、或る日本の業者がごみをフィリピンに不法輸出し、それを日本政府が引き取るようになったとの報道がされたが、ごみ処理を委託する業者の選別も大学の責任で行う必要がある。

さらにガイドラインは、ごみの分別収集・減量化の推進は、教育研究活動を行う大学および大学人に求められる次のような項目を理解し、実践する必要があるとして、(1)事業所としての大学の社会的責任、(2)教育研究における安全性の確保、(3)省資源・省エネルギー・循環型社会への意識変革、(4)地域社会に対する環境保全・環境倫理、(5)環境教育の具体的実践、を謳っている。

そのほか、キャンパスクリーンの任務のため環境指導員を編成し、廃棄物の回収・処理方法の指導、廃棄物の分別回収、ごみ清掃等の業務を委託している。

これまでは新聞・雑誌・コピー用紙などの古紙は、月に1度くらい各学部などで集めていた。しかし、これからは全学一体となって行われることになり、可燃・不燃ごみ及び資源ごみの回収がより効率よく行われ、ごみが長く放置されることがなくなり、きれいなキャンパスになることが期待される。リサイクルしても再生紙にならない古紙については、トイレトペーパーがつくられ、大学内で使われることになる。これからは回収古紙からつくられる再生紙・トイレトペーパーを積極的に使っていく姿勢が求められる。

これらのごみ減量化運動により学生達が自分たちの環境へ関心を持つようになり、ダイオキシンや環境ホルモン等の問題についても理解を深めてくれることが期待される。またサークルなどが宣伝の目的で、講義室の机上に何枚ものビラを置いたり、廊下・階段の壁に何十枚もの同じビラを貼ることが行われているが、これが教室や廊下・階段を汚すごみの大きな原因になっている。サークルなどの学生達がビラを貼っても、自分の貼ったビラは責任を持って剥がす習慣ができれば、いつもきれいな環境で講義ができるようになるだろう。ごみの減量化問題を契機に学生達が積極的に環境問題に関与してくれることを期待したい。

(名古屋大学情報文化学部教授)